

# 冬の観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和三年一月三十日(土曜日) 午後二時三十分開演

## 狂言 棒縛(ぼうしばり)

主人は自分の留守中に使用人二人が酒を盗み飲むと知り、次郎冠者を呼び出して太郎冠者に得意の棒を使わせ、二人で棒に縛り付けます。その姿を笑っていると、次郎冠者は主人に後ろ手に縛られます。それでも酒好きの二人は、主人が出掛けた後、不自由な手で酒蔵の戸を開け、酒壺の蓋を外し、器に酒を汲み取って互いに相手に飲ませます。酔って気分よくなった二人は飲めや歌えの大酒盛りに興じます。帰宅した主人が酒盃に映る姿を主人の執心と見て、謡にすからかい募り叱られます。

## 能 経政(つねまさ)

仁和寺御室の御所に仕える僧都行慶(ワキ)が出て、守覚法親王の寵愛が深かった平経政がこのたび西海(一ノ谷)の合戦で討たれたので、かつて法親王から経正へ下賜された琵琶の名器青山を据え、管絃を奏して法事(管絃講)を営むことになったと述べます。行慶は夜更け方、かすかな灯火に揺れる人影を見ます。声の主(シテ)は経政の幽霊を名乗り、妄執が消えやらす住み慣れた御所に帰参したと言います。経政は若年の頃から御室の御所で世間に交わり、青山の琵琶に親しむことを許されました。法親王の恩徳により五常の徳を守り、詩歌管絃の道に秀でることができました。合戦で討ち死にしても法親王への感謝を忘れていません。そういう亡者のためには何よりに向けるとうと、行慶の合図で奏者たちが楽を調べます。すると経政も琵琶を奏で、折からの時雨や松風も和して、幽明界を超えた夜半楽の合奏が実現します。夜遊を喜びくつろいだ経政の心にやがて修羅道の瞋恚(怒りの心)が戻ります。魄霊の姿は激戦し苦悶し、その姿を照らす灯火を消そうと夏虫のごとく飛び入り、暗紛れに失せます。琵琶だけでなく和歌にもすぐれ、他人の視線を恥じる初々しく繊細な公達像は、世阿弥の(敦盛)(経政の弟)を思わせませんが、修羅の苦しみに身を焼く現在が強調されてもいます。

(西村 聡)

シテ (平 経正) 黒垂をつけ、梨子打烏帽子をいただき、十六の面をかけ、白鉢巻をしめる。厚板を着附に着、白大口をはき、上に長絹を着て、腰帯をしめる。太刀をさす。(持物、扇)

(午後四時三十分頃終了予定)